

神の国の査証(ビザ)

丸山 勉

[聖書] ルカによる福音書 10章 17～24 節

七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」イエスは言われた。「わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を、わたしはあなたがたに授けた。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つない。しかし、悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。すべてのことは、父からわたしに任せられています。父のほかに、子がどういう者であるかを知る者はなく、父がどういう方であるかを知る者は、子と、子が示そうと思う者のほかには、だれもいません。」それから、イエスは弟子たちの方を振り向いて、彼らだけに言われた。「あなたがたのしているものを見る目は幸いだ。言うておくが、多くの預言者や王たちは、あなたがたが見ているものを見たかったが、見ることができず、あなたがたが聞いているものを聞きたかったが、聞けなかったのである。」

[序]

「聖書教育」誌に沿って、ルカによる福音書を読み進めています。

ルカによる福音書は、9章51節から、イエス・キリストの歩みが新しい局面に入ったことを伝えてくれます。9:51をお読みします。—「イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。」つまり、もう既に、ご自分がエルサレム郊外の丘の上で十字架にかけられて死ぬ、そのことをお心の中に定めての歩み、その決意を固めていらっしゃる、と言うのです。

そのイエス様のいわば十字架への道行くと、ご自分の弟子たちを町々村々に派遣していくこと——そしてそのことは、全ての人間のための「救い」を確かなものとされることでもあるわけですが——そのことが深く結びついていること、そのことが今日の箇所から伝わってくるように思います。

[1] 弟子たちを遣わす

10章の初めを見て頂くと、イエス様の弟子たち（ここでは72人）は、町々村々に遣わされて行くのですけれども、イエス様は、それに対して、恐いことをおっしゃいます。10:3に、「行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに小羊を送り込むようなものだ。」と。神の国を告げるということは、決して楽な事ではな

いよ、時には、あなた方に齒向かって来る様な出来事に出会うことだってあるよ、と、イエス様は厳しい現実を見つめさせます。これだけ聞くとひるみますよね？けれども私は思ったのですが、彼らは他でもない、**イエス様に遣わされた者たち**なのです。そしてその**イエス様ご自身が、まず、狼の群れの中に入って行かれた方**ではないか、と思いました。ですからイエス様は、弟子たちに「**財布も袋も履物も持って行くな**」と言いましたけれども、それは、「**ただわたしに信頼しなさい。わたしが全責任を取るのだから**」ということだと私は思いました。

そして今日の10章17節以下の部分ですが、ここでは、予想される厳しい反対や現実に出会った、というよりは、むしろ、弟子たちの驚いた様子が記されています。17節。「**七十二人は喜んで帰って来て、こう言った。「主よ、お名前を使うと、悪霊さえもわたしたちに屈服します。」**」

これは、よくよく注意したい言葉だと思います。「喜んで帰って来て」とありますが、これは人情としては良くわかります。悪霊の力さえも無力とされた、という現実を目の当たりにしたのですから。イエス様の**全存在**を表す**お名前の力**は物凄い、病の者も癒されたという出来事などもきっと見たのだらうと思います。だから「喜んだ。」しかし、本当は、「**恐れる**」べきではないでしょうか。そうでないと、信仰の落とし穴に入ってしまうことがあると思います。

神様が、イエス様が共にいて下さること、私たちの願いを聞いて下さること、それは大きな大きな恵みです。しかしいつの間にか、それが当然だと思い、「**私のための神様**」「**私に仕えてくれる神様**」になってしまう危険を信仰は孕んでいると思います。「**恐れ**」がなくなると、信仰の黄色信号なのかも知れないと、私自身のことを省みても思います。

そしてイエス様はおっしゃいました。18節以下です。「**わたしは、サタンが稲妻のように天から落ちるのを見ていた。蛇やさそりを踏みつけ、敵のあらゆる力に打ち勝つ権威を、わたしはあなたがたに授けた。だから、あなたがたに害を加えるものは何一つない。**」——「サタンが稲妻のように天から落ちる。」これは聖書のここだけに記されている凄い言葉です。サタンが言わば真っ逆さまに、きっとあのヨブ記にあるように、天上で神様に対して訴えていたのでしょうその**サタンが、もう完膚なきまでに無力にされてしまった**というその光景をイエス様は見た、と言うのです。十字架と復活によって成し遂げられた**神様の救いの勝利**を先取りして見た。しかもその勝利の力をわたしはあなた方一羊のようなあなた方一に授けているのだ、だからあなた方は安心して伝道しなさいと言うのです。

[2] 何を喜ぶべきか

この時に、イエス様は、こう言われました。20 節です。

「しかし、悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」

この御言葉が、私は今回、心に一番響いてきました。悪霊があなたがたに服従するからといって、そんなことで「喜ぶな」と言うのですね。悪霊が屈服する、それは正に神様の御わざ以外の何ものでもないでしょう。イエス様の御名の前には、悪霊は、とても敵わないことをよく知っているのです。悪霊は、サタンは、ある意味、誰よりも神様の力の強さを知っているのです。それに対しておののいているのです。その悪霊さえも退かせる力を、あなた方は神様から受けている。けれどもその力は、あなた方が自由に操る力なのではないのだ、ということがここで言われているのではないのでしょうか。

そうではなく、何よりも喜ぶべきことは、「あなた方の名前が天に記されていること」だ、とイエス様はおっしゃいます。「あなたの名前が天に記されている」つまり、「いのちの書」にあなたの名前が書かれているということ、言わば、「神の国のビザ」がおりているということ、これは、悪霊が屈服した光景を見るかのように、肉眼で確認できることではありませんよね。私たちが「信じる」こと、「信仰」が求められていることです。

ですから、この後でイエス様は、神様に賛美をささげながら言われました。

「そのとき、イエスは聖霊によって喜びにあふれて言われた。「天地の主である父よ、あなたをほめたたえます。これらのことを知恵ある者や賢い者には隠して、幼子のような者にお示しになりました。そうです、父よ、これは御心に適うことでした。」(21 節)

イエスさまの喜びは、現象的な喜びではありませんでした。最も内面的な喜び、聖霊が与えて下さる喜びでした。それは、ご自分の自己充足のための喜びではなく、私たちの方が満たされるための喜びだったのです。「神の国の福音」は、隠されているのです。幼な子の心で、へりくだって「受け入れる」者に見せて頂ける世界が確かにあることをイエス様は語られます。

そして、この「あなたがたの名が天に書き記されていること」とありますけれども、このためにこそイエス様は私たちのところに来て下さったのだと思います。これは決して当たり前のことではありません。天にある「いのちの書」に私たち一人ひとりの名を刻む。このためには、戦いが、犠牲が必要でした。

[3] 杉原千畝と「命のビザ」

私は、ここで、あの第二次世界大戦の真っ只中で、行き場のなくなったとりわけユダヤ人難民のために、彼らが逃れるため、大量の通過査証（ビザ）を書き続けた一人

の**外交官**の事を思い起こしました。彼の名前は、**杉原千畝**。あの「**シンドラーのリスト**」で有名な、**オスカー・シンドラー**にも似て、「**東洋のシンドラー**」とも呼ばれる人物です。

彼は、バルト三国のひとつ、**リトアニア**の領事館で働いていました。それも実は飛ばされてそこに遣わされたのです。その前は満州にいたのですけれども、当時の関東軍のあり方を痛烈に批判したので、本来ならそのあと、ロシア語も操れる者として**モスクワ**に行くことが約束されていたのですが、まずフィンランドのヘルシンキ行きを命ぜられ、その二年後、小国リトアニアに送られたのです。

しかし、そこで、**ナチスドイツ**が台頭し、大国**ロシア**との緊張感も高まり、家族も殺され、小さな子どもも抱えたような人々、特に**ユダヤ人**たちが、お腹をすかせながら、日本の通過ビザを求めてこの**カウナス**にある領事館の前に朝起きると、百人近く集まるようになって行ったのです。彼は本国日本にビザを発行しても良いか打診しましたが、断られました。彼らは、最終受入れ国に行ける保証も持たず、滞在出来る金も十分持っていないだろう、大量に日本に入ってくると困るということです。増して、当時の日本は、ドイツと軍事的に結びついていましたから。彼は悩みました。しかし杉原は、このままでは彼らは遅かれ早かれ行き場がなくなる、命を落とすと思い、知恵を使い、アメリカなど行先国への必要な手続きは納得させた上で当方はビザを出しているとし、貧しい者にも、**独断で通過ビザを発行した**のです。

その彼の行動を突き動かしたものは、**御言葉**だったと言います。彼は最初の妻がロシア系の女性で、その影響もあって、**ハリストス正教会**で洗礼を受けていました。リトアニアにいる時は、既に**幸(ゆき)子さん**という女性と再婚していましたが、彼女も正教会の信徒になっていました。御言葉と言うのは、旧約聖書の「**哀歌**」です。

「**町のかどで、飢えて、息も絶えようとする幼な子の命のために、主にむかって両手をあげよ**」(哀歌 2:19)。この言葉が、突然憔悴した子どもの姿を見た時に心に浮かび、幸子夫人に尋ねたと言います。「領事の権限でビザを出すことにする。いいか？」その杉原の言葉に、「**あとで、私たちはどうなるか分かりませんが、そうして上げて下さい**」と幸子夫人は答えたと言います。

この言葉もまた、彼が語った言葉として記録されているものです。

「**私に頼ってくる人々を見捨てるわけにはいかない。でなければ私は神に背く。**」

「**彼らは国を出たいという、だから私はビザを出す。ただそれだけのことだ。**」

杉原が発行したビザの枚数は、番号が付され記録されているものだけでも 2,139 枚にも上りました。一枚のビザで家族全員が出国出来ましたから、彼は、家族三人と見積もっても 6,000 人以上の命を救ったこととなります。ベルリンに異動を命ぜられ、出発する直前、汽車の窓を通して手渡されるビザを書き続け、もう汽車が走り出すと、「**許して下さい、私にはもう書けない。みなさんのご無事を祈っています**」と頭を下げたと言います。「**スギハアラ。私たちはあなたを忘れません。**」と、汽車と並んで泣きながら走っている人は、その姿が見えなくなるまで何度も叫び続けたと

記録されています。

やがて戦争が終わりましたが、しかし、彼は戦後、外務省から**退職通告書**を受け取ることになり、その功績が称えられるどころか、むしろ**国賊**のように見なされる時期もありました。外務省では彼の名前はタブーとなり、実に彼の公式の**名誉回復**が日本国政府でなされたのは、河野洋平が外務大臣の 2000 年の時でありました。杉原千畝は既に 1986 年に 86 才で召されています。しかし、**彼の決断**によって救われた者たちが世界中にいて、彼のことを忘れないとした人々の証言によってその働きが知られるようになったのです。

[結] 永遠の命のビザ

私が長々と杉原千畝のことを語ったのは、他でもありません、**主イエス・キリスト**のことを分かち合いたいからです。杉原のしたことは「**命のビザ**」と言われます。考えたら、たった一枚の紙きれのために、彼は自分の全てを賭して、ユダヤ難民たちを救ったのです。その紙一枚が、**命の重さに等しかった**からです。彼は目の前の人々を見て、**憐れみの心**が動いたのです。今このことに目をつむることは、神様に逆らうことだと思ったのです。それが出発点だと言えるでしょう。その心が、その後、何十万と言うユダヤ人の子孫が生き延びることに繋がっていったのです。

増してや、**イエス・キリスト**は神の独り子でありながら、私たちが、「命のビザ」よりももっと確かに、そして、全ての人の名を天の「**命の書**」に刻むために、**憐れみの心**に満たされ、はらわた痛め、ご自分が犠牲となり、その命を捧げられたのです！

「**イエスは、天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた。**」(ルカ 9:51)。まさにこのことです！

「**悪霊があなたがたに服従するからといって、喜んではならない。むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。**」

そう、決して当たり前のことではないのですね。**イエス・キリスト**が戦い、勝ち取って下さった「**永遠の命のビザ**」なのです。本当ならば、滅ぼされてもおかしくない私たちなのですから、彼が、主イエスが**私たちに替わって下さったがゆえの、滅びに定められない、私たち一人ひとりの「命」、「永遠の命」の約束**なのです。どれだけ感謝しても感謝しきれません。

私たちが出来ることは、この主イエス・キリストの変わらない愛を伝えて行くこと、そして、幼な子の心で、神様の御名を**賛美**することだと思ふのです。

お祈り致します。

「あなたがたが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を神から賜ったことか、よく考えてみなさい」。

神様、あなたは、御子イエス・キリストの十字架の犠牲によって、私たち罪人をあなたの御もとへと招き、「神の国のビザ」を発行して下さいました。これは聖霊による証印がしっかりと押された、決して消えることのない証書です。心から感謝致します！この確かなお約束がありますから、わたしたちはわざわざを恐れません。人生の中で出会う試練を、あなたと共に、またあなたに支えられながら生きていくことができます。

どうか、この確信をいつも心に保たせて下さい。そして、私たちの家族、親族、友人、仲間、まだあなたのご愛を知らない者たちにも、この「良き知らせ」を届かせて下さい。そのために、私たちの教会、私たちの交わりも祝し、用いて下さい。

私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈り致します。
アーメン。